

第9回水・緑と観光を繋ぐ回廊計画推進協議会 会議録

- 1 日 時 令和2年10月15日（木曜日）
午後4時00分から午後4時45分まで
- 2 場 所 全員協議会室
- 3 出席者 別紙のとおり
- 4 内 容

(1) 水・緑と観光を繋ぐ回廊計画の現状と今後について

5 配布資料

資料1 水・緑と観光を繋ぐ回廊計画の現状と今後について

資料2 狭山池上流部のソフト事業の方向性（案）

水・緑と観光を繋ぐ回廊計画推進協議会 名簿

6 会議内容

(1) 水・緑と観光を繋ぐ回廊計画の現状と今後について

事務局から資料1に沿って説明がされた。

長谷部産業課長から資料2に沿って説明がされた。

(杉浦町長) 回廊計画のほとんどの事業は進捗した。狭山池上流部の整備については積み残している。狭山池上流部については、新しい長期総合計画に引き継ぐ形で引き続き検討を重ねるように担当へ指示をしたところである。ソフト事業等をつないでいくという話があったが、これからどのような方向性が探れるのかももう一度研究をしなければならぬと考えている。

(質疑・意見)

(上野農業委員会会長) 当初の計画の中で上流部の会長として行ったが、当初の素晴らしい絵を見て、予算も9億程度つくということで、画期的だと考えていた。しかし、実際には町長の話のとおり、上流部の土地所有者の意向調査も行っているところではあるが、過去の議会の中で上流部の整備については調査が終わったら考えるという答弁もあった。

10年間残念ながら、ボランティアの皆さんの活動でなんとかソフト事業ができたという中で、新しい方向も、単なるボランティアさんやソフト事業だけで済む話ではない。あの地区をいかして、瑞穂の観光の拠点にするという明確な意図をもっていたかないと、これまでのソフト事業のみで終わってしまうという懸念がある。

今後の方向性として示された小麦づくりであるが、町では自分が一番行っていると

自負している。収穫後には加工や粉で売るとなっているが、大変なことである。町にはコンバインや製粉の施設もあったがなくなってしまった。近隣で言うと入間市の宮寺に1件あるが、高齢化している。次に近い場所となると川島市というところがあるそうだが、1トンから対応してもらえるとということで、それだけの量を生産することは難しい。このように小麦の活用には様々な課題も出てくる。

畑の管理をどのように行うか、体験をどう行うかも検討が必要である。体系的に計画を立てて予算を確保する必要がある。瑞穂には農業ボランティア制度はないが、そのようなものをつくり、皆ができる仕組みをつくる必要もある。

当初の計画とおりに行かず残念なところもあるが、狭山池上流部を農業の場所として開発していくにはお金がかかる。ただ、農業を体験する場所としては再生可能だと考える。例えば、指定管理者を導入し、農業指導を含めた人を置き、農業の拠点とするなど、方法は様々考えられる。

(村山都市整備部長) とてもありがたい意見だと思う。10年間、農業委員会からも指導を受け、不耕作地解消の手段として小麦畑を検討し、加えて、新規就農者の協力を得ながらひまわり畑等の整備を行ってきた。具体的な将来像を示すためにずっと事務局も悩んでいたが、時間が経過してしまった。反省点である。

今回は、将来像を明示して事務局としての意思表示をしたということ。ひばりうどんは夢の話ではなく、調査結果でも日本の小麦の9割は輸入だということ。日本の小麦の最大生産地は北海道であり、東京におけるひばりの減少は深刻になっている。しかし、上流部で声を聞いた。そのことが小麦づくり等を拡大することによってひばりのさえずりを復活できるのでは、という夢をもった。そういう一つの目標が大切だと思った。ただ作るだけでなく、食育などの体験についてもここに示した。色々な課題もあると思うが、実際に事業に参加した人の声を聞きながら、意見を入れながらやっていきたいと考える。

(杉浦町長) 地権者の意向や、事業自体が楽しくなければ続かない。農業は楽しいという視点を忘れずに、次のステップに進んでほしい。

(坂田狭山池上流部整備部会部会長) ソフト事業の方向性について、体験するとある。これは長く続けるために、教育委員会とタイアップして小学生の体験授業に使ってもらえたらいいのでは。小麦まきはできる。草取りにも参加してほしい。収穫はコンバインで行うので、その様子を見学してもらおう。収穫後の小麦を使って、家庭科でうどんづくりを体験し、食べる。自分たちが植えたもので収穫して、食べるとなると、記憶にずっと残ると思う。

小学校を見ていると、四小は他の地域と異なる。農家がある風景を知らない。二小地区にきて、農家を見て驚く子供もいる。指導も大変になると思うが、そうした四小の子が体験すれば勉強になるのでは。

(杉浦町長) 今の意見は既に事業構想に入っている。新規就農者の増加も大切だが、子供たちに農業の楽しさを知ってほしいと考えている。そういう方向性を探るように担当者に話をしている。できる限り皆の声を聞きながら進めていきたい。

(鳥海教育長) 学校教育の中で活用をという提案だが、瑞穂町では全小中学校でふるさと学習みずほ学をカリキュラムに組み込んでいる。ふるさとみずほについて学ぶための授業である。内容については、全てが自然学習や環境学習ではなく、各々の学校で目的を考えることになっている。四小では、今年はコロナウイルスの影響で出来ていないが、昨年度までは瑞穂の産業や工場等と連携して授業を実施している。

坂田部会長の提案については、三小の取組みに似ていると感じた。大豆を使ってみそづくりをしたいということで、地元の大豆生産の農業者に繋げたこともある。

各々の学校で特色を持って進めている。こういうプログラムを新たに提供していたら、連携することはできると考える。ありがたい話である。

(高水瑞穂町商工会会長) 私の母もうどん作りが大好きで、子どもの頃は魅力を感じなかったが、年齢を重ねてうどんを美味しく感じるようになった。武蔵村山市にはうどんの会という集まりがある。うどんをつくっている人だけの会ではなく、多業種の人が100名程度集まり、年2～3回集まっている。町民の人が参加できるうどん作りをアピールした方がよいのでは。武蔵村山市の取組みも、業者のものだけではなく、各町内でうどんを販売しているところがある。

瑞穂もこれからうどんを売っていくのであれば、うどんのお店を開き、経済活性化につなげていただければ。うどんには歴史があるので、瑞穂町の小麦で作ったうどんということがPR材料になる。瑞穂町産の材料を使用していることに着目して売り出せば、経済活性化に繋がる。

(杉浦町長) こういう話になると夢が広がっていく。第一歩が大切である。少しずつ広げていきたい。瑞穂町の産物は小麦以外にもある。そういうものもあわせて考えていければ。

(上野農業委員会会長) 所沢市では若い農家が所沢ビールを売り出している。羽村市では酒を造り始めた。福生の石川酒造は多摩ビールを販売しているが、実際には多摩

のものは入っていない。麦はビール用の小麦を使えば、瑞穂産ビールもできるかもしれない。麦は応用がきく。

東大和は商工会が主導でお茶うどんをつくった。本当は瑞穂の直売所が先に取り組んだが、手間がかかるということで継続できていない。地元産は単価が高い。経費がかかりすぎる。コンバインもお金がかかるが、乾燥するにも場所が必要。瑞穂は天日やビニールハウスなどでしかできない。色々課題がある。うどん店についても、材料よりも味を決めるのは自身の腕であるという方もいる。直売所のうどんでは、埼玉の粉を使っている。費用対効果の面で、瑞穂のうどん店が瑞穂産の小麦を使用するには課題がある。色々なところでタイアップする中で、少しずつ広げていくなかで考えている。高水商工会会長と話したい。

武蔵村山のうどんは家庭うどんとしてPRをしていて、使用している小麦は、最初は村山産ではなかった。ここ最近では、武蔵村山産の小麦をつくり始めた。大きな名称では武蔵野うどんとして、他市も含めて様々な連携をとっていくことで発展性が見えると思う。

(中沢回廊ルート整備部会部会長入室)

(杉浦町長) そのほかの発言はあるか。

(上野農業委員会会長) 耕心館のレストランは、瑞穂の農産物を使ってPRの拠点にできないか。調理場がないため難しいのかもしれないが、地元農産物を使ったメニューを提供することを検討できないだろうか。

(杉浦町長) 以前検討したこともあったが、調理場がないため対応ができていない。町としても、出来る限り町の生産物を地元で消費してほしいと考えている。経済の循環。今後も研究していきたい。

(事務局) うどんについて、学校との連携では四小とみずほ熟年塾が連携して行っているとのこと。加えて、農芸高校が直接うどんではないが、唐辛子をつくっている。

(杉浦町長) 町には農芸高校という大切な資源がある。これからは学生たちの力も借りていかなければならない。教育委員会と連携していく必要がある。

(4) その他

(杉浦町長) 狭山池上流部の整備と第5次長期総合計画の繋がりについて、次回の

協議会前に委員に提示する必要がある。形が決まり次第、概要だけでも報告できるようにしておくように。

午後 4 時 4 5 分終了